

The Scottish flyhalf added a second try four minutes later and Horne also **crossed the chalk** as the men in blue led 21-0 at the break, still needing another try for their bonus point. (Kyodo)

Photo: The Telegraph



「トライを決める」。ラグビーのワールドカップについての記事から。

cross the chalk は、ラグビーで相手のインゴールにボールを着地させてトライを決めること。文字通りチョークで引かれた白線を越えることからきている。**cross the line** や、ただの **cross** でもよい。

日本は宿敵スコットランドを撃破しトーナメント・ステージ進出を果たした。初の快挙である！10月20日は、ベスト4をかけて、準々決勝を南アフリカと対戦する。南アフリカは、前回ワールドカップで対戦し、日本が最後にトライを奪い、奇跡的な逆転劇を成し遂げた因縁の相手である。

今日は「トライ」の語源について書いてみようと思う。英語で、「try (トライ)」という。相手「インゴール」(ゴールエリア)にボールを「グラウンディング」することで、「5点」という大量得点を得ることを意味する。「grounding (グラウンディング)」とはボールを地面にタッチさせること。「インゴール」内に入っていて、手から落として、ボールが地面についたとしても「ノートライ」・・・

密集戦となり、ボールと地面の間に空間があったり、相手チーム選手の手や足がはさまっていても、「ノートライ」となる。アメリカンフットボールでは、「タッチダウン」という。

アメリカ人は「トライ (try)」という言葉が理解しにくいものだから、わかりやすいアメリカ英語にしたのである。日本人にとっても、この英語はあまりに簡単すぎて、日本語訳がない！適訳がないから、ラグビーをよく知らない人にはわかりにくい言葉になる。

日本語漢字であえていうと、「**試為** (しい)」ということになろう。英和辞典には、「ためしにやってみる」という意味がある。ラグビーが正式な国際ショナルボードを立ち上げた1890年の前、「トライ」は、あくまで「0点」であった。

『スポーツ大事典』(日本体育協会監修・大修館書店1987年発行)によると、「トライ (try) という用語は、もともとゴールキックを試みるチャンスを得ることであり、1890年に得点が与えられた」

最初に与えられた得点は、わずかに「1点」だった！

1891～93年に「2点」、1893～1971年に「3点」、1971年に「4点」となった。現在は、さらに「5点」に改正されている。

「トライ」というゴールキックを蹴るための「試技」の方がはるかにスポーツ的な達成感や困難

性、観客の目に映る醍醐味があるものだから、次第に点数が高くなって行った。さらに今日では、4トライ以上したチームには、「ボーナスポイント1点」が与えられる。

前回のワールドカップ、日本は世界第3位の南アに勝ったが、スコットランドに大差で負けた上に1点を献上したものだから、予選グループ・ステージで3位となり、決勝トーナメント・ステージに進出できなかった。それくらい「トライ」の持つ意味は高くなった。でも、語源は「試為(しい)」なのである・・・

適訳は「渡拉為(トライ)」・・・

適訳(中国語式)を探すと、「渡拉為(トライ)」となるだろうか?! 「渡(ト)」は、「相手の守るインゴールに進入すること」。「拉(ラ)」は、「手でボールを地面に押しつけること」。

(「拉」を『漢語林』(大修館書店)で引くと、「ひしぐ・引く・ひっぱって連れて行く」のほか「おしつぶす」という意味がある)「為(イ)」は、以上のような「行為(プレイ)」である・・・